ミネソタ通信　第９号

2010 年１１月　日本ミネソタ会発行

目次

「ご報告」 会長　岩波はるみ
「ミネソタ州ポーレンティー知事の昼食講演会」 レポーター　村松秋彦
「日本ミネソタ会総会と懇親会」 レポーター　金子真由美
「エッセー：波乱万丈な日々」 モビクリップ株式会社　代表取締役社長　森田伸
本のご紹介 「難局を乗り切るリーダーシップ　ハーバード教授が教える7つの教訓」
「今後のお知らせ」
「編集後記」

＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊

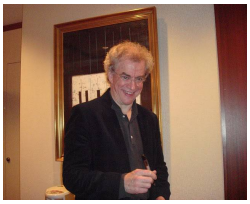
「ご挨拶とご報告」　　会長　岩波はるみ

日本ミネソタ会は、1989 年の設立以来、21 年目を迎えました。これまでの皆様のご支援に感謝いたします。

さて、私が前会長の沼形義彰様から会長職を引き継いで、1 年 4 ヶ月が過ぎました。この間、幹事メンバーおよび有志の方々と共に、「日本ミネソタ会の目的と役割は何か」「進むべき方向性はどこに」を模索してまいりました。その結論は、「日本ミネソタ会の新たな方向性」にまとめ、今年６月の総会・懇親会のご案内とともに、皆様のお手元にご郵送でお知らせいたしました。

日本ミネソタ会として従来から変らないものは「ミネソタ州に関係・興味のある人の集まり」で「親睦を深めることが最大の目的」、今後変えていきたいことは①「会の活動を活発化させ、（会費ではなく）参加費を頂戴する方式に改める」、ご連絡等も含めて②「IT 化を進めていく」こと、そして③「ミネソタ州の教育機関、ミネソタ州政府、ミネソタ日米協会等と定常的に情報交換を行う」ことです。

まず①「会の活動の活発化」の方針にそって、昨年から今年にかけて、様々な活動を行いました。2009 年８月、新横浜で LABOR DAY ピクニック、10 月にはハロウィーンピクニック。そして 11 月には Dr. Mestenhauser 来日を記念しての食事会。12 月、ミネソタ管弦楽団の音楽監督オスモ・ヴァンスカ氏が読売日本交響楽団でベートーヴェン第九を指揮なさった折には、そのコンサートをサントリーホールで鑑賞し、山下宏様のご尽力で楽屋を訪問。そして新宿三井クラブでの楽しいクリスマスパーティーの開催。今年に入ってからは、2010 年 4 月に駒沢公園での花見ピクニック、6 月の総会・懇親会は赤坂「ストックホルム」で行い、50 名近い方にご出席いただき、そして、9 月にはミネソタ州ポーレンティー知事の来日を記念し、社団法人日米協会と共催で昼食講演会を帝国ホテルにて開催。80 名以上の方にご参加いただきました。



「総会・懇親会」と「知事昼食講演会」は後述の詳しいレポートをお読みください。なお、一部のイベントは（経費等の関係から）E メールによるお知らせのみでしたので、皆様全員にお伝えできなかったことをお許しください。

次に、②「IT 化」の一貫として、ホームページも復活させました。以下の URL をぜひご高覧ください。
http://minnesota-japan.jimdo.com（日本語）
http://minnesota-japan-eng.jimdo.com/（英語）

さらに、③「ミネソタ州の教育機関、ミネソタ州政府、ミネソタ日米協会等と定常的に情報交換」については、今後の推進のために、9 月の連休を利用して、プライベートにミネアポリスを訪問して参りましたので、そのご報告をいたします。

今回の訪問の大きな目的は、（主に教育関係者への）日本ミネソタ会の PR でしたので、まず、（私の母校）州立ミネソタ大学同窓会の会長（Ph.D. Phil Esten、今年 3 月に 25 年ぶりに新任、弱冠 37 歳）にお会いいたしました。Esten 新会長は、今年度はアメリカ国内、来年度からは海外の同窓会組織を整備したいという意向をお持ちとのことでした。 そこで日本ミネソタ会にはミネソタ大学卒業生がたくさん参加していることをお話し、会の PR に努め、来日の際はいつでも大歓迎であると話してまいりました。その他、OIP（Office of International Programs ）や ISSS(International Student and Scholar Services）、Carlson School of Management の責任あるポストの方々と懇親の機会を設けていただき、今後のご支援をお願いしてまいりました。

またミネソタ大学における日本人学生の組織である JSA（日本学生会）でのスピーチを企画していただき、私の個人的体験を話すとともに、日本ミネソタ会の PR の時間を持つことが出来ました。

JSA の学生は、（日本帰国後には）これからの日本ミネソタ会を支える大事なメンバーとなりうる方々ですので、相互の HP のリンクを行い、今後は情報交換に努めていけたら考えております。

なお今年のこれからの活動予定は、12 月に第二回クリスマス会を企画しております。詳細は HP にアップし E メールでご連絡いたしますので、奮ってご参加ください。また来年も総会・懇親会（6 月 25 日、土曜日を予定）の他に、いろいろな皆様が集まるイベントを考えていきたいと思います。そして、もう 1 つ私の会長在任中の夢は、参加者を募っての「ミネソタツァー」の実現です。ご家族の方も加わって、大勢でミネソタを再訪するのも楽しいのではないか、と思うのです。その他、これからのイベント等も含めて、ご提案、ご意見、アイデア等のある方、ぜひご遠慮なく教えて頂けると幸甚です。

最後に、グローバル化の進む世の中で、ミネソタと日本をつなげる唯一の Society である日本ミネソタ会の役割は、今後もますます重要と信じております。これからも会の発展のために精進していきたいと思いますので、引き続き、ご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊

「ミネソタ州ポーレンティー知事の昼食講演会のご報告」（2010 年 9 月 17 日）

ミネソタ州ティム・ポーレンティー知事がミネソタ州経済ミッション団と共に、9 月に初来日いたしました。そこで日本ミネソタ会では、社団法人日米協会と共催で、ポーレンティー知事をお招きし、9 月 17 日（金曜日）に帝国ホテ「雅〈みやび〉の間」において、「昼食講演会」を開催いたしました。

ポーレンティー知事は、2003 年 1 月の就任以来、増税なき財政再建の実現によって、その政策手腕を高く評価されております。現在ミネソタ州は、生活、教育、経済関連の各指標においても全米トップクラスにランクされております。例えば、ミネソタ州は住民一人当たりの Fortune 500 社の企業数(21 社)で1位にランクされ、全般的な”生活の質”では全米1位です。また人口に対する高校卒業者割合でも、25 歳以上の大学卒業者割合でも全米1位です。ミネソタは全米で最高の ACT スコアーを取り、”アメリカで最も健康な州”に数えられています。

今回ポーレンティー州知事は、日本で協力関係を発展させることに熱心な 50 人以上のビジネスリーダー、

教職者及び州関係者と共に来日しました。「昼食講演会」の当日、知事は昼 12 時の開演の 30 分前には会場にいらして、来場の皆様と親しく歓談されました。この昼食会には多くのミネソタ関係者も参加され、日本からの参加者と歓談する良い機会も得られました。そして昼食後は、日本ミネソタ会長の岩波さんの司会で、州知事から「グローバル経済下のミネソタ州の統治」と言うテーマで講演をしていただきました。お話の内容はミネソタの話にとどまらず、米国、中国やグローバル経済についての広範囲の内容で、今後のグローバル化の世界の変化と、その対応への重要性を示唆する貴重な御講演でした。

講演は1時間弱の時間で、その後は Q&A の時間が設けられました。日本ミネソタ会の皆様からも活発な質問があり、知事は様々な 角度からの質問に快くお答えいただきました。質問の中には次期の大統領選に出馬するかどうかなどの話題も出ていました。そうした中、あっという間に歓談終了の時間をむかえてしまいましたが、知事は次の訪問の予定時刻が近づいているにもかかわらず、快く歓談や写真撮影等に応じてくださり、終始なごやかなうちに実りの多い昼食講演会を終了しました。（レポーター、日本ミネソタ会　幹事　村松秋彦）

＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊

日本ミネソタ会総会・懇親会のご報告 （2010 年 6 月 19 日）

2010 年の日本ミネソタ会総会＆サマーパーティーが 6 月 19 日土曜日、地下鉄赤坂見附駅前のスウェーデン料理レストラン「ストックホルム」で行われました。梅雨時にもかかわらずお天気は晴れ。49 名の方が参加いたしました。

パーティーは、山口副会長のメイン司会で行われ、最初に岩波会長による日本ミネソタ会の近況及び今後の方針とご協力へのお願いの話があり、顧問の梅津先生に乾杯の音頭をとっていただきました。その後、元 JASM President ダリル・マグリーさんによるスピーチに続き、副会長の中村旭さんをファシリテーターに、幹部サポートメンバーとしてご活躍の鈴木ひとみ（旧姓：前田）さんと、幹事の小菅岳司さんにもご参加いただき、それぞれの国際交流の経験を踏まえ、パネルディスカションを行いました。

更に、出来るだけ多くの参加者とのコミュニケーションをはかろうという目的で、全員参加で『自己紹介ゲーム：Who am I?』が行われました。ゲームは、参加者の背中に有名人・キャラクターの名前が書いてある紙を貼り、その人物・キャラクターを当てるというものでした。参加者は、別の参加者に YES/NO で答えられる質問をします。例：「この人は日本人ですか？」など。皆さんの顔・名前が覚えられましたでしょうか。

続いて、最近ミネソタからお帰りになられた山下宏さんのスピーチがあり、9 月のミネソタ州知事来日の件などが紹介され、そしてパーティーは前会長の沼形義彰さんのご挨拶で締めとなりました。会長の岩波さんのもとには、皆さん楽しんでいただけたことや思いがけない人との再会があって嬉しかった等、運営側としては嬉しいお声が届いているようです。

最後に、ご参加頂いた皆様、暑い中また遠いところ、どうもありがとうございました。また今回はご参加いただけなかった皆様、また次回はぜひご参加ください。（レポーター、日本ミネソタ会幹部サポートメンバー、金子真由美）

＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊

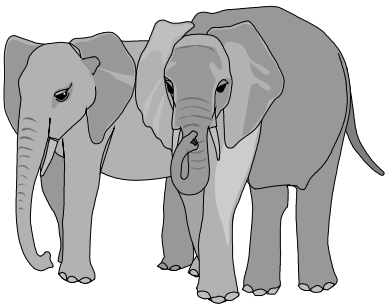
「波乱万丈な日々」　　モビクリップ株式会社　代表取締役社長　森田伸

『海外駐在』、『海外赴任』という言葉を耳にした時、アメリカや欧州各国での優雅な生活等を思い浮かべる方たちも少なくないと思います。でももし、赴任先がアフリカのナイジェリアや中東のサウジアラビアだったらあなたなら、どんな決断を下すでしょうか？

私がナイジェリア駐在となったのは 1983 年。ですから、四半世紀以上も前の事です。
この当時のナイジェリアの首都はまだラゴスで、現在の首都であるアブジャに新首都を建設し、首都を移転させることが決定された後でした。新首都の設計には日本の丹下健三事務所が携わっていたため、当時のラゴスには結構な数の日本人が駐在していました。

ナイジェリアでの私の仕事は、日本の某大手家電メーカーの現地生産工場の立ち上げでした。赴任する前あたりから、じりじりと円高が進み、日本から完成品を輸出していたのでは利益を確保できないという状況が明確に見えてきており、日本の多くのメーカーが現地生産へと移行しようとする過渡期の真っただ中の時期でした。

当時 20 代の中頃から後半にかかる年齢だった私は、アフリカという言葉を聞いただけで、『今までに行ったこともないし、ゾウの群れや猛獣なども観られるかもしれない・・』といった恐ろしいほど安易な考えで、赴任先を詳しく調べることもほとんどせず、物見遊山にでも出かける様な調子で、この大きなプロジェクトの一員としてナイジェリアに渡ってしまったのです。



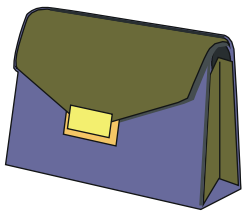
それを考えると、私のミネソタとの繋がりの出発点を思い出してみても、上記の状況とさほど変わらず、自分の本性（後先見ず）がどんなもので、自分の進歩の無さを切実に実感しています。
中学に入り、初めて英語に接するようになってから、アメリカに対する漠然としたあこがれが次第に強くなり、“いつかは必ずアメリカへ行くんだ！！”という気持ちを持ち続けるようになっていったのです。しかし、東京に行くことだけでも気後れする様な田舎者の学生が、大学にやっと入学できたその年（1974 年「昭和 49 年」）に、突然、親に対し、大学を辞めた事を伝え、ミネソタ大学で勉強するための金の無心をしたのですから、“親の心子知らず”を具現化したような、両親にとってはどうしようもないバカ息子だったのでしょう。
当時、私がミネソタについて持っていた基礎知識等はほとんど無いに等しく、単なる昔からの、アメリカへの憧れだけで、かの地へ行った当時のことを思い返すと、実に無謀で、“若かったからこそ出来たこと”と、思いはするものの、ナイジェリアの件でも原点はほとんど変わっておらず、良く言えば楽天的とも云えますが、本質的にはいい加減な性格の人間なんですね。

話はナイジェリアへと戻りますが、ラゴスに着いてみると、頭の中に思い描いていた“アフリカの大草原”等とは程遠く、空港内のパスポートコントロールではパスポートにドル紙幣を挟み込まなければ、入国も儘ならないし、ホテルへ向かう車も、ライフルを持った武装警官に止められ、（今もそうかも知れませんが、当時は特に治安が悪かったですから）何度もトランクを開けさせられ、カバンの中身を調べられる始末。その都度、米ドル紙幣の力を借りるといったありさまでした。
『とんでもない所へ来てしまったなぁ』とは思っても、後悔先に立たずで、やっとホテルにたどり着いたその晩はさすがに、『これからどうしたらいいんだろう？』と途方に暮れました。しかし、元来“喉元過ぎれば熱さを忘れる”といった性格が強いせいか、翌朝からは、『まあ、やってみればどうにかなるさ』といった気持になり既に現地に駐在していた商社の駐在員の方と、これから住むべきアパート選びや、駐在中、自分の身の回りの世話（炊事、洗濯、運転手など）をしてくれる現地の人間の面接などを始めていました。

この当時、今では当たり前のインターネット等は全く普及しておらず、日本の本社との連絡手段は、ほとんど場合テレックスに頼っており、毎日、伝送用の文面の長～い、長～い紙テープを作っては報告書や様々な依頼を送信し、時差の関係で半日ほど遅れて帰ってくる本社や事業部からの回答をもとに、現地にあるイギリスのゼネコンとの打ち合わせに明け暮れ、あっという間に数カ月が過ぎ去ってしまいました。

駐在中の仕事の内容を細かく書いても、読まれる方にとっては何の興味もなく、面白くもなんともないでしょうから、ここでは割愛し、普通、日本だったら考えられないようで、当時の現地ではごく当たり前にあったエピソードをいくつかご紹介いたします。

今のナイジェリアはわかりませんが、当時、ラゴスにおける貧富の差は想像以上に大きく、ホワイトカラーを含めたごく一部の富裕層と、圧倒的多数の貧困層にわかれていました。また、欧州各国（イギリス、フランス、ポルトガル等）による植民地時代が長かったため、現地の人たちが我々（欧米人を含めた外国人）を呼ぶ際、常に“マスター（Master）”と呼ぶように習慣付けられていたため、私もそのように呼ばれていました。
しかし、この国（海岸部分）は 19 世紀ごろまで「奴隷海岸」と呼ばれていたように、自由を奪われ、搾取され続けた歴史的な負の遺産が残っているのか、多くの人たちの心は荒んでいて、「隙さえあれば、人を騙したり、何かを持っている人から物を奪う」といった事が頻繁に起こっていました。



私も、アタッシェケースを手に大通りの向こう側のビルへ行こうと、歩道橋を歩いていると、数人の普通の男の子が近づいてきて、何の警戒もしていない私の腕に安全ピンを刺し、痛みでケースを持つ手を離した瞬間、他の男の子が落としたケースを奪って駆け去ってしまった事がありました。（それ以来、通りの向かい側へ行く時でも、自分の運転手に車で送ってもらうようにしました。）
その他、今では笑い話になっているエピソードですが、こんなこともありました。
あの当時、私は日本から何枚ものラコステのポロシャツを持っていっておりました。（ナイジェリアは暑いし、私が汗かきなので、一日に 2 回程度は着替えていました。）しかし、数カ月すると、洗濯をするたびに、そのシャツが無くなっていくという不可思議な現象が起きたのです。
このことを商社の駐在員に告げたところ『今度から、シャツの内側の裾に漢字で名前を書いておきなさい。そして、シャツが無くなったら、森田さんのアパート近くの道端で物を売っている露店を覗いてごらん‥‥』と言われたのです。
それから、また、シャツが無くなってから数日後、言われたとおりに道端の露店を覗いてみると、見たことのあるシャツが何枚か並んでおり、その一つから私の名前が書いてあるシャツが出てきたのです。
結局は、私の衣類の洗濯をさせるために雇った人間が、洗濯物の中から間引きをして、何枚かを外の露天商に売っていたんですね。彼を問いただしても、考えられる限りの嘘や言訳ばかりが出てくるばかりで、埒が明かず、結局は彼を解雇して、別の人間を雇いました。

また、私の食事の世話をしてくれていた人の田舎の祖母が亡くなられたとの話を耳にしたので、その週末に彼と彼の家族が帰郷する際、日本的な感覚の香典の意味で少しのお金を（現地通貨のナイラで）渡したところ、それ以来、ひと月かふた月に一度くらい、彼の家族の親類の不幸の話が続くので、その話を現地にいる日本人の友人に話したところ『この国では香典の様な習慣はほとんど無いから、お金欲しさにうまく利用されてるんじゃないの？』と言われ、それ以後その種の話が来ても、お金を渡さず、お悔みだけを言うようにしたところ、彼の親類の不幸の話はほとんど沙汰止みとなってしまったという事もありました。

二年間の駐在期間中、このような馬鹿げた話は数限りなくあり、それを書き始まったら限がありません。こんなわけのわからない毎日を送っていても、新しい工場の建設は（さまざまな問題はあったものの）着実に進み、決められた期限内に完成し、事業部側に新工場を引き渡すことで、私のナイジェリアでのミッションは終了したわけです。
蛇足になりますが、ナイジェリアでのミッションを終了後、数ヵ月後には同じようなミッションで、サウジアラビ

アにも（約 2 年間）赴任いたしました。

今になって振り返ると、ミネソタ大学行きを決断してから今日まで、ある意味で波乱万丈な日々だったように思われます（自分で言うのもおかしな感じがしますが‥）。
いずれにせよ、アフリカや中東での駐在は楽なものではなく、挫折しそうになったことは何度もありました。それでも、乗り越えることが出来たのは、ミネソタのあの厳しい冬を何度も越してきた事にある様に思われてなりません。
寒く厳しい冬を乗り越えた向こう側には、春を迎えられた喜びが必ず待っており、そんなミネソタの自然が、私に「我慢すべき時はとにかく耐えることが大切で、その厳しさの中にも、心の持ち方によっては楽しいことは沢山ある」ということを教えてくれたと思っています。

我が第二の故郷ミネソタに感謝をこめて

＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊

本のご紹介
「難局を乗り切るリーダーシップ　ハーバード教授が教える7つの教訓」
ビル　ジョージ　著、梅津　祐良　訳
生産性出版　￥1,800

当会顧問で早稲田大学ビジネススクール経営専門職大学院前教授の梅津先生が訳された本が、このほど出版されました。内容は、リーマンショックのような未曾有の難局に遭遇したときに企業・組織のトップはいかに対処すべきかを説いたものです。
題名にある 7 つの教訓とは、次の通りです。本書ではこれらについて、実例を交えながら分かりやすく説明がされています。
1. あなたを取り巻く現実を直視する。
2. アトラスを真似て、すべてをあなた一人の方に負うべきではない。
3. 問題の原因を深く掘り下げる。
4. 長期戦に備える。
5. 危機状況からの学習を無駄にしない。
6. あなたがスポットライトを浴びているなかで、どのようにキャリア上の真の目的を追求することができるのか。
7. 攻勢に転じ、勝利を目指す。

この本の著者は、ハーバード大学ビジネススクール・マネジメントプラクティス教授のビル　ジョージです。著者と訳者の直近の肩書きだけ見ると、経営学者がオブザーバーとしてさまざまな経営者の成功談・失敗談を見聞きして書いた本のように思われますが、さにあらず、実は著者も訳者も教壇に立つ前は、世界最先端の医療技術企業のメドトロニックの米国・日本それぞれのトップを勤めており、その豊富なビジネス経験に基づいて語られる内容は直截的で説得力があります。さらにこの本には、企業や組織のトップの人々のみでなく、一人一人のビジネスマンが仕事を進めていくにあたって参考にすべき、示唆に富んだ箇所も多々ありますのでどなたにもお読みいただけます。

また、重要なポイントとなる部分では原文も引用されており、著者の生の文に触れることができ、より一層理解を深めることができます。ご一読をお薦めします。

（山口健一）

＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊

「今後のお知らせ」

日本ミネソタ会では、今後も日本とミネソタをつなぐ様々な活動を行う予定です。現在日程が決まっているのは、下記の通りです。皆様のご参加を心待ちにしております。

12 月　クリスマスパーティー （詳細が決まり次第、メールでご連絡）

2011 年 6 月 25 日　12 時―14 時　総会とサマーパーティー （赤坂ストックホルム）

なおご質問、リクエスト等がございましたら、hiwanami@gmail.com、あるいは電話 090-2636-1309 日本ミネソタ会事務局までお願いいたします。

＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊―＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊

「編集後記」

２年半ぶりのミネソタ通信です。今号は岩波会長に原稿書き、そして原稿集めと奔走していただきなんとか発行にこぎ着けました。この間、ミネソタ会執行部は会に新しい吹き込もうと頑張って参りました。少しではありますが、会の活性化を果たせたのではないかと思っております。今後も皆さんに、古い友達と旧交を温めると同時に新しい友達をつくる場を提供していきたいと思います。よろしくお願いします。

（山口健一）